

市川房枝、そこから続く「長い列」 参政権からジェンダー平等まで

女性の政治的権利が剥奪されていた時代、権利獲得のため活動した多くの女性がいた。1925年25歳以上の成年男子に選挙権を与える「普通選挙法」が成立し、婦人参政権運動は勢いを増す。米国滞在から帰国し、好条件でILO東京支局に勤務していた市川房枝は、34歳で職を辞し、運動中心の生活を選ぶ。男子だけの選挙権を「普選(普通選挙)」と呼ぶ世間の常識に対し、「婦選」を掲げてキャンペーンを展開した。男性議員を頼みに請願を続けるが、戦争に突入し、運動は中断。日本女性が男性と同等の参政権を得たのは、第二次世界大戦敗戦後である。

女性リーダーとして戦時体制に組み込まれていた市川は、54歳で公職追放となる。女性参政権実現を目にするも、自身は公的活動を禁じられた状態で、自殺も考えた。追放を解かれたのち、「出たい人より出したい人」と有権者に推され、組織に頼らない理想選挙で参議院議員に当選したのは60歳。以降87歳までの人生を政治家・運動家として駆け抜けた。女性差別撤廃条約の批准実現の背後にも、女性団体を組織し、政府を叱咤した市川の働きがあった。

生誕130年、市川房枝の名前すら知らない人もいる今、豊富な資料から生き生きと姿をよみがえらせ、現代的な解釈を加えながら、挫折も含めその生き方と功績を明快に描き、後に続く女性を励ます著作である。国会に市川に続く議員を送らなければ、私たちは今後もずっとジェンダー平等の実現から遠い国で生きなければならない現実があることを肝に銘じたい。

公益財団法人 市川房枝記念会女性と政治センター 理事 国広 陽子さん

堀の中のおばあさん 女性刑務所、刑罰とケアの狭間で

刑務所の入所受刑者数が減少傾向にある中、女性、それも高齢の女性受刑者が増加している。本書はジャーナリストの猪熊律子氏による女性刑務所のルポルタージュである。丹念な密着取材により、普段なかなか触れることのできない刑務所の人々やその生活をうかがい知ることができる。万引きなどの軽微な窃盗や覚醒剤の使用が罪名の大半を占める女性受刑者の語りは、親からの虐待といった生育環境や生活の困窮、孤独などがその罪の背景にあることを感じさせる。この場所に来る前に、それを防ぐ手立ては本当になかったのだろうか。

この社会で女性の困窮は見えづらい。節約で耐え忍ぶ、男性や家族へ依存する、性産業で働くといった術を知っている女性たちは、常に将来への不安や暴力の危険にさらされながらも不可視化されてしまう。家族を基礎単位として設計された日本の社会保障制度は、女性が個人として自立した生活を送ることを困難にし、2020年に起きた渋谷ホームレス殺人事件が示すように、路上への現れが命の危険と直結するような社会でもある。

刑務所に繰り返し来る女性の多くは「居場所がなかった」と語るという。刑務所を「居場所」にしないためには、男女間の賃金格差の解消や個人としての自立した生活を支える制度的改変だけでなく、社会的な孤立に対する処方箋が必要だ。本書の中でも触れられる伴走支援は孤立した人々とつながり続けることを目的とする。彼女たちのいる「堀の中」と私たちの暮らす社会は地続きだ、と知ることからつながり始める。本書はその第一歩となるだろう。

九州大学 法学府 博士後期課程・元NPO法人抱樸職員 小幡 あゆみさん



- 野村 浩子 著
- 垂紀書房
- 2023年初版
- 2,000円(税別)

婦選

25歳以上の男子すべてに選挙権を与える「普通選挙法」に対し、「婦選」なくして「普選」なしと抗議を込めて、女性の政治参加の権利を主張した。第1回全日本婦選大会で披露された与謝野晶子作詞「婦選の歌」は「同じく人なる我等女性」と謳う。1946年には東京代々木に拠点施設「婦選会館」を設立、現在に至る。政治分野のジェンダー・ギャップは大きい。後続世代には「婦選」に込められた政治参画を実現する責任があろう。

くにひろ ようこ
国広 陽子さん



- 猪熊 律子 著
- KADOKAWA
- 2023年初版
- 940円(税別)

伴走型支援

社会的孤立が深刻化する日本社会において提唱された新たな支援の形。問題解決のみを目指すのではなく、一人ひとりの生きづらさや困難に寄り添い、人生に伴走することを目的としている。本書に登場する女性たちの多くが周囲に相談できる人がいなかつたと語っている。「ひとりにしないこと」を目標とする伴走型支援の理念は政府の政策にも広く採用されているが、孤立しない社会の実現には私たち一人ひとりの行動も大切なファクターである。

主婦である私がマルクスの「資本論」を読んだら

15冊から読み解く家事労働と資本主義の過去・現在・未来

韓国フェミニズムが熱いといわれて久しいが、本書でその層の厚さを改めて思い知った。著者のチョン・アウン氏は、会社を辞めて主婦になった。あるとき親戚から「夫のお金で楽に暮らしているじゃないの!」と言われ、うろたえた。なぜ社会には主婦を見下す風潮があるのか。その問いをもとに15冊の本を読み、答えを探ったのが本書である。

見つけ出した答えは、資本主義が原因であるという考えだった。マルクスの『資本論』とも格闘し、資本主義とは資本家が労働力を搾取し利潤を得るためにシステムであると知る。しかしそれだけでは女性のタダ働きは説明できない。そして次に合ったのは、第二波フェミニズムに連なる議論だった。

第二波フェミニズムが明らかにしたのは、資本主義と家父長制との関係である。家父長制は資本主義と組み合わさることで、女性の家事労働を「愛」の名のもとに無償で搾取する仕組みとなる。無償だからこそ家の価値は貶められ、女性たちは労働市場に出ても二流の労働者として買い叩かれる。こうしてつぱら家事を行う主婦は、見下してもいい存在となるのだ。

ページを繰るごとに、かつて主婦の生活から逃げるように大学院に飛び込んだ自分を振り返って、「おお、姉妹よ!」と感慨を覚えずにはいられなかった。フェミニズムはみんなを「バリキヤリ」にさせるものだけではない。「生の祭典」であるはずの家事や育児の価値を貶めているのは一体何か。ぜひ一緒に考えてみてほしい。

さとむら わかこ
九州大学 アジア・オセアニア研究教育機構 学術研究員 里村 和歌子さん



- チョン・アウン 著
- 生田 美保 訳
- DU BOOKS
- 2023年初版
- 2,200円(税別)

家事労働

炊事・洗濯・掃除など、家庭内で行われる貨幣の支払われない労働のこと。フォーマルな労働市場の外部で行われるため、国の就業や所得統計に反映されていない。サラリーマンと主婦という近代家族の性別分業のもと、①労働者を毎日一定レベルの健康状態に保つ、②次世代を産み育てる、という再生産労働もある。60年代半ばから70年代に台頭してきた第二波フェミニズムのうち、マルクス主義フェミニズムにとって極めて重要な鍵概念とされる。

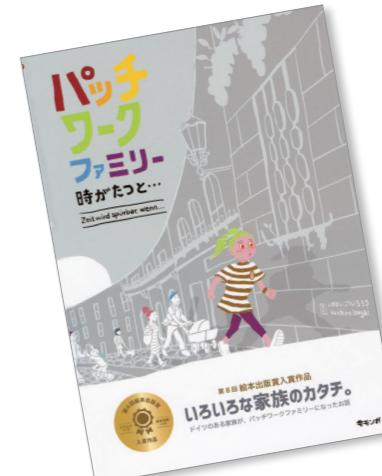
パッチワークファミリー 時がたつと…

NPO法人 プライドハウス東京 共同代表 小野 アンリさん

「時がたつこと、それはわたしの前がみがのびること」という一文から始まるこの絵本では、「時がたつこと、それは」という言葉の心地よい繰り返しのリズムの中で、時の流れとともに主人公や周囲に訪れる変化が穏やかに語られる。時が流れる中でさまざまなことが起こる。成長したり変化したり、新しい人との出会いもあれば、別れもある。嬉しい気持ちになることもあれば、悲しい気持ちになることもあるし、時がたつことが悲しみを癒やすこともある。ママとパパが離婚することもあれば、ママにカレシができたり、パパにもカレシができたりすることもある。そして、パッチワークのように家族が広がり人生に彩りが増す。

特に最後のイラストが気に入っている。冒頭では誕生日を祝う3人と猫一匹の家族が描かれている。時がたち、家族のカタチが変わって、だからこそもっとぎやかでできになった誕生日パーティー。幸福そうな姿を眺め、一人ひとりの人生に思いを馳せていると胸がジーンとする。

子どもたちにとって絵本の中で多様な性や生き方に触れられることには大きな意味がある。LGBTQ+の子どもたちにとって、絵本にLGBTQ+のような人物が登場し、周囲に温かく迎えられ幸せそうに生活している姿に出会うことは、将来に希望を感じるきっかけとなりうる。LGBTQ+ではない子どもたちにとっても、性の多様性に幼い頃から触れられることは寛容な感性の素地となるだろう。これからは日本でも子育てをするLGBTQ+の人たちは当たり前に増えていくだろうから、LGBTQ+の親をもつ人たちのストーリーとしても貴重である。



- いそがいこういちろう 著
- みらいパブリッシング
- 2023年初版
- 1,400円(税別)